

曲目解説

ボロディンは、1834年11月12日ペトログラードに生まれ、1887年2月27日に同市で亡くなったロシア国民楽派（5人組）の優れた音楽家である。実父は昔コーカサスで栄えたイレメティア王家の後裔であるゲデオノフ公であるが、庶子であったため、公の使用人ポルフィル・ボロディンの子として届出された。少年時代から音楽と科学に深い天分を示したが、1885年には薬学博士の照合を受け、学者と音楽家の華々しい二重生活を送った。「中央アジアの草原にて」は、二つの主題を持つ交響詩である。ロシアの平和な歌が聞こえる中、遠くから馬やラクダの足音が響いてくる。やがてアジアの歌が聞こえてきて、そしてその二つの歌は重なり合い、共通のハーモニーを奏でる。その響きは再び遠い彼方の空へと消え去っていく。

モーツァルトは、ピアノ協奏曲の完成者と言ってよいと思われる。後期の作品に限らず、番号の若い作品も実によく出来ていて、ピアノの独白、木管楽器との語り、オーケストラとの対立と協調など、協奏曲のおもしろさ、魅力が溢れている。本日演奏する第20番は1785年の始めに作曲された。傑作ぞろいのピアノ協奏曲の中でも、この曲以降の8曲は特に優れている。演奏家の技巧を誇示することに主眼が置かれているのではなく、人間的な内容が盛り込まれ、密度の高い構成に支えられた深みのある音楽になっている。この第20番の協奏曲は、この当時の協奏曲としては珍しく短調をとっている。特に第1楽章の冒頭は、せき立てられるような激しい感情の嵐を思わせ、聞くものをとらえる。曲全体としては交響曲を思わせる構成のしっかりしたもので、ベートーヴェンはこの協奏曲を非常に高く評価していて、この曲のためにカデンツァを書いている。（本日の演奏でもベートーヴェンのカデンツァが使われる予定）

ドボルザークは若いころからブラームスを尊敬し、その作品に刺激を受け、感動し、そして参考にし、次第に独自のものを確立していった。1876年ドボルザークはウィーンで彼自身のスラブ狂詩曲第3番の演奏を聞く。その指揮をしていたのが、名指揮者ハンス・リヒターであった。その演奏に感動したドボルザークは、彼に捧げる交響曲を書くことを約束する。そうして出来たのが、本日演奏する第6番の交響曲である。ハンス・リヒターは、実はブラームスとは対立関係にあったワーグナーの熱烈な信奉者であったが、捧げられたこの曲は、随所にブラームスの影響の見られる作品になっている。ブラームスの第2交響曲の影響が強いが、それでもやはりドボルザークらしいフレーズ、メロディーはそこそこに溢れ、若いドボルザークの意欲が十分に感じられる作品になっている。